

高等学校における性教育に関する一考察 — 高校生とその保護者を対象とした意識調査より —

松 岡 真理子*・入 谷 仁 士**・山 梨 八重子**・松 田 芳 子**

A Consideration of Sex Education in High School

Mariko MATSUOKA, Hitoshi IRITANI, Yaeko YAMANASHI and Yoshiko MATSUDA

Abstract

This research was done on high school students and their guardians in order to understand their consciousness and the actual conditions of sex education. An investigation by questionnaire was conducted which targeted high school students and their guardians. Its results showed that guardians have strong concerns about sex education in school, although there is puzzlement about sex education in the home, and it became clear that they have many expectations about sex education. On the other hand, although the high school students did not have expectations like guardians, it became clear that they do not feel satisfied with the present sex education, and would like to learn more. It is desirable that guardians also teach these things to their children. Furthermore, in order for high school students to study sex education, it was suggested that its support in both school and home is important, and it is important that the school and guardians have a mutual understanding of that.

Key Words: sex education, high school student, guardian

1. はじめに

近年、児童・生徒を取り巻く環境は、日々著しく変化しており、インターネット、携帯電話などの情報機器等の発達や、核家族化、経済の悪化などの社会情勢が、成長期にある児童・生徒の心身の健康に大きな影響を及ぼしている。現代的健康課題のひとつである性に関する問題についても、このような社会背景によりさまざまな影響を受け、年々深刻さを増している。そのため、学校における性教育はますます期待されているところである。特に高校生から大学生になるにつれて性交経験を持つ者の割合は著しく増加することや¹⁾、10代後半から性感染症の感染者が増加すること²⁾、また多くの者が性について学ぶことが保障される最終的教育機関となる可能性が高いことなどから、高等学校における性教育の充実が必要である。

しかしながら、現在学校で行われている性教育についてみると、竹俣ら³⁾や本多ら⁴⁾は中高生を対象

とした意識調査を行い、子どもたちが期待する性教育と実際の性教育には隔たりがあることを指摘している。また、岡部ら⁵⁾は大学生を対象とした調査を行い、高校時代の性教育を「役に立った」と思っている者が半分に満たないことなどを報告している。

さらに数見ら⁶⁾は、「高校生段階での性交（セックス）は適切でない」とする意見（中教審の教育課程審議会の見解）についてどう思うかを高校生に質問し、「そう思わない」あるいは「どちらともいえない」との回答が8割を超えることなどから、高校生に「性交は不良」との姿勢で臨むスタンスでの性教育では聞く耳を持たない性教育になりかねないことを指摘している。

このように、現在高等学校における性教育は高校生の性に関する意識等の実態に応じた学びある内容とはなっておらず、決して充実したものとなっていないのが現状であるといえよう。

高等学校における性教育が充実したものにならない要因として、時間の確保の問題⁷⁾、有効な指導方法がわからないといった問題⁸⁾、さらには性の問題は基本的にプライベートで家庭の問題と考えられ、性教育を行うという意識に向かう教員が少なかった

* 熊本大学大学院教育学研究科修了生

** 熊本大学教育学部

りすること⁹⁾などが挙げられている。また、性教育バッシングに影響を受け、無難な性教育に流れてしまい、人工妊娠中絶や性感染症にまともに対峙するための避妊の学習や、関係性の問題に正面から打ってでるような教育にも躊躇がなされていることもその要因である¹⁰⁾との指摘もなされている。

このような学校側の躊躇などが、性教育の低調要因として指摘されているが、高校生の保護者は、こういった高等学校における性教育の現状などについてどのように考えているのだろうか。今後、高等学校における性教育を充実させるためには、高校生に加え、高校生の保護者の性教育に関する意識も明らかにした上で、検討していくことが必要となるのではないと思われる。

しかしながらこれまで、小・中学生の保護者に対して、性教育に関する意識調査¹¹⁾¹²⁾などはみられるものの、高校生の保護者に対して、性教育に関する意識調査を実施したものはあまり見られない。

そこで、本研究は、高等学校における性教育の充実を図るための基礎的資料を得ることを目的として、高校生とその保護者を対象にした、性教育に関する意識調査を実施したのでここに報告する。

2. 研究方法

1) 調査対象と期間・方法

K県内A高等学校の1～3学年の生徒(女子)1076名、およびその保護者を対象に調査を行った。期間は平成21年10月23日(金)から1週間程度とした。

生徒に対しては、無記名自記式による調査用紙を、10月23日配布し、10月26日に担任によって回収した。なお有効回収率は86.0%であった(1年生364名、2年生356名、3年生356名の計1076名中1年生336名、2年生265名、3年生324名の計925名)。

保護者に対しては、10月23日に生徒を通じて無記名自記式の調査用紙を配布し、1週間程度期間をあげ、郵送にて回収するようにした(以降、これを「郵送による保護者の調査」とする)。なお、回収率は43.5%であった。回答者の性別は、女性452名(96.6%)、男性11名(2.4%)無回答5名(1%)の計468名であり、平均年齢は46.2歳であった。

保護者に対しては郵送調査の後、さらに追加で調査を実施した。対象は、K県内A高等学校の保健委員会に所属する保護者13名、PTA役員に所属する保護者11名、そのどちらにも属さない保護者23名の計47名である。

保健委員とPTA役員に対しては平成22年11月19日に行われた「性教育に関する学校保健委員会」の

後に実施した。

また、そのどちらにも属さない保護者に対しては機縁法により、郵送および直接調査用紙を手渡しする方法で、性教育に関する意識調査を行った(以降、これを「一部の保護者を対象とした調査」とする)。

2) 調査内容

生徒については、「親との性に関する会話の頻度」、「学校の性教育に期待する内容項目」などである。その他「性教育に関する考え」について自由記述で求めた。

郵送による保護者の調査内容は、「学校の性教育への関心度」「子どもとの性に関する会話の頻度」「学校の性教育に期待する内容項目」などである。その他「性教育に関する考え」について自由記述で求めた。

郵送調査後に行った一部の保護者を対象とした調査では、「性交や性的接触について子どもが知ることは、人間として教育を受ける権利のひとつである」「性交について知り、考えることは、人との関わりや生き方を考えることと、つながっている」「高校生には、性交、避妊方法を含め、性についてきちんと教える必要がある」「性交や性的接触について考えさせること抜きにして、性感染症やエイズ予防教育はできない」「性交には生殖以外の意味があることを学ばせたい」「性教育は家庭ではなかなかできないので、できれば学校でやってもらいたい」「性は子どもには知ってほしくない、隠しておきたい」「性教育が非難されたりバッシングされたりして、学校の性教育は停滞しているがもっとしっかり教えてほしい」と思うか、などである。

3) 分析方法

調査データの集計および分析にはExcel統計2008、およびIBM SPSS Statistics Version 19を用いた。

生徒および郵送による保護者の調査における「学校の性教育に期待する内容項目」についての回答は、「そう思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で問い、それぞれ4点、3点、2点、1点と得点化し、高得点になるほど期待度が高くなることを示すようにした。また、郵送調査後に行った一部の保護者を対象とした調査の回答についても、「そう思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で問い、それぞれ4点、3点、2点、1点と得点化した。いずれにおいても高校生(学年別)と保護者の意識の比較を一元配置の分散分析を用いて行い、その後LSD法による多重比較を行った。

さらに、その他の項目については、必要に応じて χ^2 検定を用いて生徒の学年差を検討した。なお有意水準はすべて5%未満とした。

4) 倫理的配慮

質問紙は無記名であること、個人が特定できないこと、研究目的以外には使用しないこと、記入は自由意志であり強制ではないことなどを、担任の先生からの説明を通じて同意を得て、生徒に対しての調査を実施した。

保護者に対しては、配布封筒に生徒用の調査で説明したような内容について記載された説明用紙を同封し、同意を得た場合にのみ、調査用紙に回答を記入し、送付してもらうようにし、調査を実施した。

また、生徒に実施した調査においては、回答が他者にみられるなどのことがないようにするために、記入した質問紙を配布した封筒に入れ、糊づけした状態で回収した。

3. 結果

1) 学校で行われる性教育に対する保護者の関心度

「子どもの学校の性教育に関心があるか」との問いに対する回答結果についてみると、「とてもある」16.2%、「ややある」38.5%、「どちらかといえばある」35.4%、「どちらかといえばない」8.9%、「ない」0.4%であった(表1)。

表1 保護者の学校の性教育への関心度(%)

項目	N=468
とてもある	16.2
ややある	38.5
どちらかといえばある	35.4
どちらかといえばない	8.9
ない	0.4
その他・無答	0.2

2) 子どもに対する性教育の実施場所に関する保護者の意識

性教育はどこで行うのがよいかの問いに対する回答結果についてみると、「学校だけで行う」3.2%、「家庭だけで行う」0.6%、「学校と家庭の両方で行う」93.8%であった。また、「行わなくてよい」と回答した者は1.1%であった(表2)。

表2 性教育の実施場所について(%)

項目	N=468
学校	3.0
家庭	0.2
学校と家庭	93.8
しなくていい	1.3
わからない	1.1

3) 保護者の学校の性教育への認知度について

学校の性教育への認知度については、「知っている」と回答した保護者は「知っている・やや知っている」を合わせて76.5%であった(表3)。

表3 学校の性教育についての認識(%)

項目	N=468
知っている	19.7
やや知っている	56.8
あまり知らない	21.8
全く知らない	1.3
無回答	0.4

4) 保護者からみた子どもとの性に関する会話頻度について

「自分の子どもと性に関する会話をするか」との問いに対する回答についてみると「よくする」4.7%、「ややする」33.1%、「あまりしない」49.6%、「しない」12.0%、「したくない」0.0%であった(表4)。

表4 子どもとの性に関する会話の頻度(%)

項目	N=468
よくする	4.7
ややする	33.1
あまりしない	49.6
全くしない	12.0
したくない	0.0
無回答	0.6

5) 子どもからみた保護者との性に関する会話頻度について

「自分の親と性に関する会話をするか」との問いに対する回答についてみると、「よくする」1.1%、「ややする」8.1%、「あまりしない」32.8%、「全くしない」41.9%、「したくない」14.6%であり、学年間に有意な差はみられなかった(表5)。

表5 親との性に関する会話の頻度 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	全体 N=925
よくする	0.9	0.8	1.5	1.1
ややする	7.7	6.0	10.1	8.1
あまりしない	29.5	31.3	37.3	32.8
まったくしない	44.6	45.7	36.1	41.9
したくない	16.1	14.3	13.3	14.6
その他・無回答	1.2	1.9	1.5	1.5

$\chi^2(8) = 12.58$ non significant

6) 保護者および子どもが高校における性教育に対して期待する内容について

保護者および子どもが高校における性教育に対して期待する内容についてみたところ、すべての内容において保護者の方が、高校1・2・3年生の生徒よりも期待が高く、また、高校3年生の生徒は、高校1・2年生の生徒よりも期待が高かった(表6～16)。

また、保護者および生徒のどちらにおいても「人間尊重・男女平等の教育」「男女のあり方・生き方の教育」「性情報への対処」「望ましい男女交際」「家庭や社会での役割責任」といった項目についての「非常に期待する」との強い期待を表す回答率は、「命の大切さ・誕生について」「性犯罪に対する予防教育」「避妊方法」「性感染症・エイズなどの予防教育」などに対する期待よりも低い割合を示していた。

表6 人間尊重・男女平等の教育 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	15.2	13.7	21.7	61.0
やや期待する	48.6	49.2	52.6	32.6
あまり期待しない	29.5	29.4	22.0	6.0
全く期待しない	6.7	7.6	3.7	0.5
平均値	2.72・0.80	2.69・0.80	2.92・0.76	3.54・0.63

F(3・1346)=108.811 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1, 2年)

表7 男女のあり方・生き方の教育 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	15.5	14.5	21.1	54.5
やや期待する	50.2	50.0	52.0	37.6
あまり期待しない	27.7	27.5	22.6	6.3
全く期待しない	6.7	8.0	4.3	1.6
平均値・標準偏差	2.74・0.78	2.71・0.81	2.90・0.77	3.45・0.68

F(3・1352)=78.672 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1, 2年)

表8 命の大切さ・誕生について (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	23.7	29.0	33.1	76.2
やや期待する	48.3	46.6	47.4	19.7
あまり期待しない	22.2	17.9	16.4	4.1
全く期待しない	5.8	6.5	3.1	0.0
平均値・標準偏差	2.90・0.83	2.98・0.85	3.11・0.78	3.72・0.53

F(3・1347)=99.245 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1年)

表9 妊娠など性機能について (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	16.7	17.9	25.2	68.0
やや期待する	52.3	56.5	51.6	27.3
あまり期待しない	25.5	19.5	19.6	4.1
全く期待しない	5.5	6.1	3.7	0.7
平均値・標準偏差	2.80・0.78	2.86・0.77	2.98・0.77	3.63・0.59

F(3・1353)=109.012 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1年)

表10 性感染症・エイズなどの予防教育 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	20.0	24.8	34.2	81.9
やや期待する	49.4	51.9	47.5	16.2
あまり期待しない	24.8	16.8	15.8	1.5
全く期待しない	5.8	6.5	2.5	0.4
平均値・標準偏差	2.84・0.81	2.95・0.82	3.13・0.76	3.79・0.47

F(3・1362)=145.974 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1, 2年)

表11 避妊方法 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	14.0	18.3	29.1	70.6
やや期待する	49.1	52.7	49.5	23.4
あまり期待しない	30.5	21.0	18.9	4.6
全く期待しない	6.4	8.0	2.5	1.3
平均値・標準偏差	2.71・0.78	2.81・0.82	3.05・0.76	3.63・0.64

F(3・1362)=122.123 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1, 2年)

表12 性情報への対処 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	13.1	12.2	21.7	60.2
やや期待する	52.0	53.4	52.0	32.9
あまり期待しない	28.6	26.0	22.6	6.3
全く期待しない	6.4	8.4	3.7	0.7
平均値・標準偏差	2.72・0.77	2.69・0.79	2.92・0.76	3.53・0.64

F(3・1357)=122.123 P<0.001 (保護者>1～3年 3年>1, 2年)

表13 望ましい男女交際 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	18.8	16.0	17.6	58.6
やや期待する	45.3	49.2	51.4	31.4
あまり期待しない	30.1	27.5	25.4	8.9
全く期待しない	5.8	7.3	5.6	1.1
平均値・標準偏差	2.77・0.82	2.74・0.81	2.81・0.78	3.47・0.70

F(3・1359)=81.978 P<0.001 (保護者>1~3年)

表14 性犯罪に対する予防教育 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	22.5	20.2	29.1	78.0
やや期待する	45.9	54.2	53.3	20.0
あまり期待しない	26.1	18.7	14.9	1.6
全く期待しない	5.5	6.9	2.8	0.4
平均値・標準偏差	2.85・0.83	2.88・0.81	3.09・0.73	3.76・0.49

F(3・1361)=140.124 P<0.001 (保護者>1~3年 3年>1, 2年)

表15 家庭や社会での役割責任 (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	14.3	15.3	18.3	62.7
やや期待する	47.9	50.4	56.0	31.3
あまり期待しない	32.0	25.6	20.7	5.1
全く期待しない	5.8	8.8	5.0	0.9
平均値・標準偏差	2.71・0.78	2.72・0.83	2.88・0.76	3.56・0.63

F(3・1357)=116.512 P<0.001 (保護者>1~3年 3年>1, 2年)

表16 性の人権・DVセクハラ (%)

項目	1年生 N=336	2年生 N=265	3年生 N=324	保護者 N=468
とても期待する	18.1	18.3	28.1	68.4
やや期待する	47.5	52.9	51.4	28.1
あまり期待しない	28.8	21.0	17.4	3.3
全く期待しない	5.5	7.8	3.2	0.2
平均値・標準偏差	2.78・0.80	2.82・0.82	3.04・0.76	3.65・0.55

F(3・1351)=120.031 P<0.001 (保護者>1~3年 3年>1, 2年)

7) 保護者の性教育に関する意識

「性交や性的接触について子どもが知ることは、人間として教育を受ける権利のひとつである」「性交について知り、考えることは、人との関わりや生き方を考えることと、つながっている」「高校生には、性交、避妊方法を含め、性についてきちんと教える

必要がある」「性交や性的接触について考えさせること抜きにして、性感染症やエイズ予防教育はできない」「性を学び深く考えることは、自分や他人の性を大切に、性について真剣に考えることにつながる」との問いに対して「そう思う・やや思う」との回答は80~100%の高率でみられた(表17~21)。

表17 性交や性的接触を知ることは教育を受ける権利である (%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	69.2	39.1	63.6	53.2
やや思う	23.1	47.8	27.3	36.2
あまり思わない	7.7	13.0	9.1	10.6
そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
平均値・標準偏差	3.61・0.65	3.26・0.68	3.54・0.69	3.43・0.68

F(2・44)=1.359 non significant

表18 性交を知り考えることは人との関わり、生き方を考えること (%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	76.9	39.1	72.2	57.4
やや思う	15.4	60.9	18.2	38.4
あまり思わない	7.7	0.0	9.1	4.2
そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
平均値・標準偏差	3.69・0.63	3.39・0.50	3.64・0.67	3.52・0.58

F(2・44)=1.352 non significant

表19 高校生には性交、避妊方法を含め、性について教える必要 (%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	92.3	82.6	81.8	85.1
やや思う	7.7	17.4	18.2	14.9
あまり思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
平均値・標準偏差	3.92・0.28	3.83・0.39	3.82・0.41	3.85・0.36

F(2・44)=0.351 non significant

表20 性交を考えること抜きに、性感染症やエイズ教育はできない (%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	76.9	47.8	81.8	63.8
やや思う	23.1	39.1	18.2	29.8
あまり思わない	0.0	8.7	0.0	4.3
そう思わない	0.0	4.3	0.0	2.1
平均値・標準偏差	3.77・0.44	3.30・0.82	3.82・0.40	3.55・0.69

F(2・44)=3.278 non significant

表21 性を学ぶことは自他の性を大切に、性を考えることにつながる(%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	84.6	69.6	63.6	72.3
やや思う	15.4	30.4	36.4	27.7
あまり思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0
平均値・標準偏差	3.84・0.37	3.69・0.47	3.63・0.51	3.72・0.45

F(2・44)=0.717 non significant

また、「性教育は家庭ではなかなかできないので、できれば学校でやってもらいたいと思うか」との問いに対しての回答についてみると、「そう思う・やや思う」とを合わせると55.3%の保護者が「家庭ではなかなかできないので、できれば学校でやってもらいたい」と回答していた。(表22)。

表22 性教育は家庭ではなかなかできないので学校でしてほしい(%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	7.7	17.4	9.1	12.8
やや思う	23.1	52.2	45.5	42.5
あまり思わない	46.2	17.4	36.4	36.2
そう思わない	23.1	0.0	9.1	8.5
平均値・標準偏差	2.15・0.90	2.87・0.69	2.54・0.82	2.60・0.83

F(2・44)=3.493 P<0.05 (保健委員>一般)

さらに、「性は子どもには知ってほしくない、隠しておきたいと思うか」との問いに対しての回答についてみると、「そう思う・やや思う」とを合わせると34.1%の保護者が「性は子どもには知ってほしくない、隠しておきたい」と回答していた(表23)。

表23 性は子どもに知ってほしくない、隠しておきたいもの(%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	0.0	0.0	18.2	4.3
やや思う	30.8	34.8	18.2	29.8
あまり思わない	38.5	47.8	0.0	34.0
そう思わない	30.8	17.4	63.6	31.9
平均値・標準偏差	2.00・0.81	2.17・0.72	1.91・1.30	2.06・0.89

F(2・44)=0.362 non significant

その他、「非難・バッシングされたりして、学校の性教育は停滞しているがもっとしっかり教えてほしいと思うか」との問いに対しての回答についてみると、「そう思う・やや思う」とを合わせると87.3%の保護者が「学校の性教育は停滞しているがもっと

しっかり教えてほしい」と回答していた(表24)。

表24 性教育がバッシングされ停滞しているがもっとしっかり教えてほしい(%)

項目	保健委員 N=13	一般 N=23	役員 N=11	全体 N=47
そう思う	38.5	34.8	36.4	36.2
やや思う	38.5	56.5	54.5	51.1
あまり思わない	15.4	8.7	9.1	10.6
そう思わない	7.7	0.0	0.0	2.1
平均値・標準偏差	3.07・0.95	3.22・0.62	3.27・0.65	3.19・0.72

F(2・44)=0.311 non significant

4. 考察

1) 学校と家庭の両方で担う性教育の重要性について

今回の郵便による保護者の調査において、「性教育はどこで行うべきか」の問いに対して「学校と家庭の両方で行うべき」と回答した保護者は93.8%と、そのほとんどが「性教育は学校と家庭とが担うべき」との意識を持っていることが明らかとなった。

しかしその一方で、郵送調査後に行った一部の保護者を対象とした調査では、「実際には家庭では性教育はできないので学校でしてほしい」と思うか、との問いに対して「そう思う」「やや思う」をあわせると50%以上の保護者が「性教育を行うことは、家庭では難しいので学校でしてほしい」と思っていることが明らかとなり、先の「性教育は学校と家庭の両方で行うべき」としていた保護者の意識とにズレがみられた。

このような意識のズレは、保護者が性教育を家庭でも行いたいと思う気持ちと、現実には性教育を家庭で行えるかどうかを、保護者自身が捉えなおした時のギャップにより生じたのではないと思われる。

つまり、保護者自身、性教育が学校と家庭との両方で行われることが最も望ましいことを認識していると思われる。しかし一方で、丹羽ら¹³⁾も、保護者が「子どもと性について話すにはどう切り出しているかわからないといった戸惑いや子どもの反応に対しての不安などを持っていること」を明らかにしているように、家庭での性教育の実施の難しさを感じ、「まずは学校で性教育を行ってほしい」と考えている親が多くいるのではないと思われる。

このことは、今回の郵送調査における自由記述にも「親としては、恥ずかしくてうまく教育できない」「面と向かって子どもと話せない」「家庭においては話づらいというのが本音です」などの回答がみられたことから裏付けられよう。

また、保護者からみた子どもとの性に関する会話の頻度についてみると、「よくする」「ややする」との回答をあわせて37.8%の保護者が「自分の子どもと性に関しての会話をする」と回答し、「したくない」との回答は0.0%であった。一方で、子どもからみた自分の親との性に関する会話の頻度についてみると、「よくする」「ややする」との回答をあわせて9.2%の子どもだけが「自分の親と性に関しての会話をする」と回答し、「したくない」との回答は14.6%であり、保護者との回答にズレが見られた。

小学生を対象とした調査で、「最初に性に関する質問を誰にするか」と質問したところ「母」が最も多かったこと¹⁴⁾、また、中学生を対象とした調査では「友達」が過半数以上を占め、「保護者」を選んだものはわずかであること¹⁵⁾が報告されている。このような報告から考えても、実際には、高校生が回答しているような割合程度にしか保護者と性についての会話は行われていないものと考えられる。

また、今回このように性に関する会話の頻度の捉え方に親と子でズレが生じたのは、保護者が性に関する話と捉えている内容と、高校生の子どもたちが性に関する話と捉えている内容とにギャップがあったためではないかと思われる。

例えば、保護者は、子どもが親に話した内容の中に「性に関すること」と思えることが少しでもあれば、そのことを性に関する会話と捉えたのではないかと思われる。しかし一方で子どもは、親に話す性に関する内容を限定し、実際には高校生からみて「性に関しての話」といえるような話は親にはしないようにしているのではないかと思われる。

いずれにせよ、子どもの方がより強く親と性に関する会話することに抵抗があるのではないかと思われる。それは、今回の調査で、子どもと性に関する話をしたくないと考えている親はいないのに対して、子どもの方は親と性に関する話をしたくないと考えている者もいたことから、裏付けられよう。

数見ら¹⁶⁾は、性は、基本的にプライベートで家庭の問題と捉え、性教育を行うという意識に向かう教員が少なかったりすることを指摘しているが、このような状況だけを考えても、高校生は、学校でも、家庭でも性について学ぶ機会がほとんどないまま、社会に出ていくことになりかねない。

さらにこのような状況では、子どもたちは、性＝いやらしいことといった捉え方だけをしてしまうことにつながるのではないかと思われる。こういった性についての捉え方では、ますます家庭において、保護者と命の大切さや性の大切さなども含めて「性に関すること」を話さなくなっていくであろう。

このようなことから、これから生きていく子どもたちが、「性」を学び、「性」について考えられるようになるには、性教育の重要性を感じている一部の教員だけが性教育を担うのではなく、学校全体の共通理解のもとでの性教育が進められていくことがやはり重要であろう。

もちろん、家庭で性教育を行いにくい現状にあるからといって、学校が性教育を全て担うのではなく、ほとんどの保護者が感じているように、やはり家庭での性教育も重要で、必要とされるものである。

本研究において、「性教育は家庭ではなかなかできないので学校でしてほしい」との意識が、「学校保健委員会に所属する親」の方が「一般の親（所属していない）」よりも低くなっている。

このような結果は、学校保健委員会に所属している親は、所属していない親に比べ、性教育の重要性について認識していたり、性に関する知識等を若干多くもっていることにより、家庭での性教育は難しいものであるが、家庭で行うことも非常に重要と認識し、できるだけ取り組むようにしようとしているのではないかと思われる。

つまり、性教育の重要性等を親が認識したりすることにより、親の「家庭では性教育ができない」といった意識が少しずつ払しょくされていく可能性があると考えられる。

そのため、保護者も、性教育の意義や性に関すること等を学ぶなどし、学校と家庭の両方で性教育を進めていけるようにしていくことが大切であろう。

2) 高等学校における性教育のあり方について

今回、高校における性教育で「人間尊重・男女平等」「男女のあり方・生き方」「命の大切さについて」「妊娠などの性機能」「性感染症・エイズの予防」「避妊方法」「性情報への対処」「望ましい男女交際」「性犯罪に対する予防」「家庭や社会での役割責任」「性の人権・DV・セクハラ」といった項目に対して、生徒およびその保護者がどの程度期待するかを調査した。結果、保護者は、どの学年の生徒と比較しても、これらのすべての項目に対する期待が高くなっていた。

このことから、保護者は、我が子を心配し、これから生きていく我が子が、性に関するさまざまな知識を身につけ、自分の性と向き合い、性を真剣に考えてほしいと考えていることが伺える。

高校生が、小中学生に比して性交経験を持つ可能性が高くなること、卒業後が進学或いは社会に出る高校生にとって性的な関わりを他者と持つ可能性が高くなること、一方で性について学ぶ機会が減少し

ていくことなどは、保護者にも容易に想像できよう。そのため、我が子の現在、将来を思えば、性についてできるだけ学んでほしいと考えるのは当然のことであろう。

しかし、保護者と比較すると、実際に性について学ぶ高校生のこれらの項目に対する期待は低くなっていた。

この結果は、高校生が「性に関する教育」を学校には期待していないことをあらわしている、とは決して言えないのではないかと考えられる。

それは、3年生が1、2年生よりも「命の大切さについて」「妊娠などの性機能」「性感染症・エイズの予防」「避妊方法」などの項目での期待が高くなっていること、生徒の性教育に対する自由記述のなかに「性教育が甘い。もっとちゃんとしてください」や「マニュアル的な話はいらない。」「ある程度習ってきたのでもっと違うことを習いたい。」などの記述があること、調査校で行われた学校保健委員会において、各学年生徒の保健委員に対して「なぜ性教育に対する期待度が低いのか」との問いに対して「内容のほとんどは小・中学校でもしてきたことと同じような内容であり、また性教育か…とってしまう」との返答が返ってきたことから伺えよう。

卒業後が進学或いは社会に出る高校生にとって性的な関わりを他者と持つ可能性が高くなる一方で、性について学ぶ機会が減少していく3年生にとっては、もっと性についてさまざまなことをしっかりと学びたかった、といった気持ちの表れではないかと考えられる。

また、生徒の回答において「人間尊重・男女平等の教育」「男女のあり方や生き方の教育」「望ましい男女交際」「家庭や社会での役割責任」といった項目の「非常に期待する」といった強い期待を表す回答率が、「命の大切さ・生命の誕生」「性犯罪に対する予防教育」「避妊の方法」「性感染症・エイズなどの予防教育」などに対するそれよりも低かったことは、現在の高校における性教育の課題を表しているのではないかと考えられる。

「望ましい男女交際」「人間尊重・男女平等の教育」「男女のあり方や生き方の教育」「家庭や社会での役割責任」などについては、高校生が自ら性と向き合い、考えるのではなく、「高校生にとって性交は不良」であるといったことや、「こうあるべき」といったことを、おしつけるような形で授業が行われていることの表れともいえるのではないと思われる。数見ら¹⁶⁾も指摘しているように、このような性教育では高校生が性についての学びを得ることが出来ないことを示しているのではないかと考えられる。このこ

とは、特に「男女交際について」の前に「望ましい」といったおしつけ的な形容詞をつけた質問である「望ましい男女交際について」の期待度が、どの学年においても低くなっていたことから裏付けられよう。

さらに、岡部ら¹⁷⁾の調査では、高校の性教育で最も実施された内容が「性感染症」であること、そして性教育全体が役に立ったと思っている大学生が46.2%で、高校時代にもっと聞きたかったものが「性感染症」であったことを報告している。

本研究においても「性感染症・エイズ」についての高校3年生での学習ニーズが高くなっていることから考えると、先の調査結果と同様の状況を示していると思われる。

ここで考えなくてはならないことは、なぜ高校生が知りたい・学びたいと望むような内容を扱っても、高校生がしっかりと学べたと思えないような現状となるのかについてであろう。

例えば、性感染症やエイズを扱うにしても、性交は高校生にとって駄目であることを押し付ける形でこれらを扱ったりするような授業では高校生は全く聞く耳を持たないであろう。

では一方で、性感染症に感染している高校生が多くいることに目を向け、その予防を目的として、性感染症について具体的で医学的に詳しい知識が取り上げられた授業であればよいのであろうか。たとえ、このような授業であったとしても、先ほど同様に、「性感染症」や「性」を自分のこととして捉えることができていなければ、高校生が性感染症に感染した具体的な話をしても、聞く耳を持たない・あるいは持てない高校生が多く出てくる可能性があるのではないと思われる。

郵送調査後に行った一部の保護者を対象とした調査結果において、「性交や性的接触について子どもが知ることは、人間として教育を受ける権利のひとつである」「性交について知り、考えることは、人との関わりや生き方を考えることと、つながっている」「高校生には、性交、避妊方法を含め、性についてきちんと教える必要がある」「性交や性的接触について考えさせること抜きにして、性感染症やエイズ予防教育はできない」「性交には生殖以外の意味があることを学ばせたい」との問いに対して、「そう思う・やや思う」との回答は80%～100%の高率でみられた。

これらのことから、保護者も高校生に対して、性については「こうあるべき」といったことを押し付けるような性教育や、予防的な知識だけを具体的に詳しくとりあげるような性教育では、高校生は

「性」について学び、深く考えていくことはないことを、自分の子どもをみて、感じとっていることをあらわしているといえよう。

つまり、高校生もその保護者も、「おしつけ」といった形や、いくら具体的に詳しくとも「予防的な視点」だけの形などで、性についての内容が扱われる授業ではなく、どのような性に関する内容を学ぶにしても、性や体についての事実などの学びを通じて、自らの性と向き合い、考えていくことができるような授業を必要としているのであろう。

一方で、保護者は「性は子どもには知ってほしくない、隠しておきたい」と思うか、の問いに対して「そう思う・やや思う」を合わせた回答率は34.1%であった。保護者の自由記述にも「性に関して、子どもが不潔に感じるといけない」「性教育を受けることによって興味を持ちどんなものかセックスしてしまいそうで危ないと思います」「興味本位で変な方向へ行くのではないかと思います」などの記述がみられた。このような複雑な思いも保護者は持っているが、そのまた一方で、「性教育が非難されたりバッシングされたりして、学校の性教育は停滞しているがもっとしっかり教えてほしい」との問いに対して、「そう思う・やや思う」を合わせた回答率は87.3%であった。

保護者は、だれよりも我が子のこと、将来のことを心配しており、「性について子どもに学ばせたいが、もし…」といった不安を抱くのも当然のことである。しかし、村瀬¹⁸⁾が、快楽性の問題など、人間にとって性とはどういう意味を持つのかについて考えさせる授業が今すぐに可能であると思わないが、青年期の性教育にとって避けることが出来ない、難しいが魅力的重要課題となっていくことを指摘しているように、保護者も日々成長する我が子をみて、「おしつけ」や「単なる予防的な視点」での性教育ではなく、「性」についての意味を大人の都合で限定するのではなく、このようなことについてもしっかりと考えることが必要であるということも実感しており、今の学校の性教育を停滞と捉え、充実を望んでいるものと思われる。

今後、一部の教師だけでなく、学校全体で、今回の調査で明らかになったような「高校生自身の、性について学びたいと感じている声」と、「保護者が、本当は我が子のために性を学ばせる必要があると感じている声」にしっかり耳を傾け、「おしつけ」や「単なる予防的な視点」からだけではなく、高校生が「性」についての意味などを自分たち自身でしっかりと考えることができるような性教育を行っていくことが重要であらう。

また、このような性教育を進めていくためにも、佐藤¹⁹⁾が「性教育が難しいといわれる一番の理由は、あまりに大人が性に対してわいせつ感を持ってしまっていることではないでしょうか」と親の立場から述べ、鹿間²⁰⁾が、そのことが「学校現場で性教育を開始する場合の非常に大きな課題である」と述べているように、大人の性に対する認識を深め、「子どもたちが性を学び・性を考えるためには学校と家庭が重要である」といったことを学校全体と保護者がお互いに再確認していくことも必要であらう。

5. おわりに

高校生とその保護者は、高等学校における性教育の現状などについて一体どのように考えているかを明らかにし、今後の高等学校における性教育を充実させるための指標を得るため、K県内A高等学校の生徒に対しては、留め置き法で、その保護者に対しては、郵送法で性に関する意識調査を実施した。

さらに、郵送調査後、学校保健委員に所属している保護者13名、PTA役員の保護者11名、そのどちらにも属さない一般保護者23名を対象に、性教育に関する意識調査を実施した。

その結果、1) 高校生は、現在の高校における性教育については不満を持ち、もっとしっかりと学びたいという意識を持っていること 2) 保護者も、高校生と同様、学校での性教育の充実を望んでいること 3) 保護者も性に関する情報等を得ることで家庭でも性教育をむずかしいと感じないようになること 4) 高校生もその保護者も、「性交はダメ」といった押しつけや、性感染症等の単なる予防的発想の性教育ではなく、「性」についてももっとしっかりと向き合い、考えることができるような性教育を高等学校に望んでいることなどが示唆された。

しかしながら、今回の調査は、K県のA高等学校だけを対象に実施したもので、必ずしも一般化できる結果であるとはいいきれない。そのため、今後さらに調査対象を拡げ、分析していくことが必要であると思われる。また、今回の調査では、高校生に必要とされる具体的な性教育の内容、その進め方、保護者と学校との連携方法などについては検討することができなかった。今後、さらにこのようなことが検討できるような調査も行う必要があると考えられる。

文 献

- 1) 財団法人日本性教育協会：「若者の性」白書第6回青少年の性行動全国調査、小学館、2007、pp. 13-15

- 2) 岩室紳也：思春期の性—いま何を、どう伝えるか、大修館書店、2008、pp. 95-96
- 3) 竹俣由美子ほか：思春期の子どもの性に関する研究第1報—性に関する親子の会話と性情報の入手について、金沢大学つま保健学会誌、2010
- 4) 本多正尚ほか：小・中・高校生に対する性教育の実態とその評価、琉球大学教育学部紀要、第71集、2005
- 5) 岡部恵子ほか：大学生に認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題（第1報）、母性衛生、2009
- 6) 数見隆生：10代の性をめぐる現状と性の学力形成、かもがわ出版、2010、pp. 136-137
- 7) 前掲書6）、2010、pp. 128-131
- 8) 前掲書6）、2010、pp. 128-131
- 9) 前掲書6）、2010、pp. 128-131
- 10) 前掲書6）、2010、pp. 131
- 11) 石沢敦子ほか：思春期における子どもの性教育の在り方（その1）、群馬パース大学紀要 第6巻(1)2004
- 12) 富樫健二ほか：現代の性教育環境および発育発達に応じた性教育実施に向けて、三重大学教育学部紀要、1997
- 13) 丹羽さゆりほか：中学生を持つ保護者の性知識と性教育に対する意識、生命健康科学研究所紀要、創刊号、2005
- 14) 和田和子ほか：小学生の性意識の実態調査、北海道教育大学紀要（教育科学編）第55巻、第1号、2004
- 15) 和田和子ほか：中学生の性意識の実態調査、北海道教育大学紀要（教育科学編）第56巻、第2号、2006
- 16) 前掲書6）、2010、p. 131
- 17) 前掲書5）
- 18) 村瀬幸治（人間と性教育研究協議会編）：「新版人間と性の教育 性教育のあり方、展望」、大月書店、2006、pp. 70-74
- 19) 佐藤春世：保健の授業に親として望むこと、体育科教育52巻、10号、大修館書店、2004
- 20) 鹿間久美子：「性の健康教育」における高校生の成長過程の研究—我が国「性教育」の経緯と学習支援者としての養護教諭の機能—、現代社会文化研究No. 32、2005